

ミュンヘンのロースクール日記(11)



会員 押鴨 涼子

昨年に引き続き今年もアイスランドで火山の噴火がありました。昨年は欧州全土で軒並み空港が閉鎖されてしまいました。今回噴火した火山は昨年とは別の火山ということで、被害も昨年ほどひどくならない、と言われていましたが、少しずつ、空港が閉鎖されていき、ドイツでもハンブルグやブレーメンで空港が閉鎖されたようです。



(ブレーメンの音楽隊)

さらに同時期にハンブルグで腸管出血性大腸菌 (EHEC) に由来する「溶血性尿毒症症候群 (HUS)」の大規模な食中毒が起きました。当初、ドイツ政府は、スペイン産のトマトやキュウリが感染源であるとアナウンスしていましたが、その後の調査で EHEC の型が異なることが分かり、連邦リスク評価研究所は特に北ドイツで入手したトマト、サラダ用キュウリ、サラダ用葉菜の生食を控えるようにとの声明を発表し直しました。これについてはスペイン政府もかなり気を悪くしたようです。今年は世界中で色々な出来事が起きます。

今回は、ロースクールについては、プログラムのボリュームの 1/3 を占め、そして一年がかりで取り組んだ修士論文について、その足跡をたどる形でご紹介し

てみようと思います。ミュンヘン紹介としては、ミュンヘンがその昔バイエルン王国だった時代の繁栄を物語るお城に焦点を当ててみました。

1. ロースクール：修士論文

国際知財専門家養成のための IP ロースクールを謳い文句に掲げている MIPLC ですが、座学の講義の他に、修士論文の提出が必須です。1年のプログラムで修士論文まで書き上げるロースクールは珍しいそうです。私は、留学ということで、英語能力の向上も目論んでいたため、MIPLC の楽しみの一つがこの修士論文でした。以下に、一年を通じてどのように修士論文が作成されていったのかをご紹介します。

1) テーマ選定

MIPLC では、以前もご紹介しましたが、10月のプログラムが始まってすぐに、『Legal Writing』という講義がありました。ここでは、主に、テーマの選定の仕方、修士論文を書くにあたっての注意点、特に、他の論文の引用について（これは、最近ドイツでは、国防大臣が博士論文中で引用を怠ったために辞任するという事件が記憶に生々しいです。）などの説明を受けます。本講義中で1パラグラフ程度で自分の考えをまとめる宿題がでますが、正式には、翌年の1月までにテーマの概要を考える期間が与えられます。私は、日本にいるときから修士論文のテーマを「環境技術と特許」と決めており、本講義中、講義後の質問等で色々アドバイスを頂けたのが有益でした。

2) 指導教官選定

1月に自分の修士論文のテーマ概要を提出すると、プログラムダイレクターがテーマにふさわしい指導教官を選定して下さります。MIPLC では、世界中から IP の分野では超一流と言われる教官が招聘されています。『そのような名だたる教官から教えを乞うことは非常に名誉なことである』、というようなことが以

前の HP には書いてあったような気がします。学生でも、誰が指導教官になるか、というのはキッチントークの話題の一つでした。

私の考えは少し違っていました。まず、毎日の講義で聴く・読むという機会は与えられていましたので、修士論文作成については、英語力向上（書く）の他、ディスカッション力（話す）もつけたいと思っていました。そうすることで、英語の Hearing; Reading; Writing; Speaking という要素を万遍なく向上することができる考えたのです。しかし、1) 超有名な教官は超多忙で世界中を飛び回っていることが多く、そういう方々から一体どれだけ懇切丁寧な指導を乞うことができるか；2) ドイツ以外の国、いや、マックスプランク以外に在籍している教官と Face-to-Face で議論をするのは不可能、ということを書き考えていたので、指導教官については、少々心配していました。

そんな頃、環境技術に関する国際法と特許に関する講義を含む新規講座が開設されるという通知がありました。担当教官はマックスプランクのフェロー（上級研究員）で、この方は MIPLC の講師陣でも最年少にもかかわらず、国際著作権法の講義でその知識の豊富さは実証済です。

プログラムダイレクターから、彼に修士論文のことを相談してみてもどうかという提案もあり、お伺いのメールを出してみたところ、3日後にミーティングを設定して下さり、そのミーティングでも、最近の研究のトレンドとして次から次へと資料を出して下さり、また、私の論文の方向性のアイデアなど、いくら話しても話尽きないといった感じで、その「無尽蔵の知識」に圧倒されて、メモすら取り切れなくらいでした。

さらに、私が弁理士ということで、教官にとって特許実務はとても興味があるので、よかったら指導教官をしてもいい、というお話まで頂きました。私は、このミーティング如何で彼に指導教官になって頂くようお願いをしてみようと思っていたのですが、ミーティングの最中に是非この方に指導教官になって頂きたいと思うに至ったため、これはとても嬉しいお申し出でした。プログラムダイレクターに確認したところ、当初「私の専門分野（バイオ特許）であれば、超有名な先生に指導教官になって貰うこともできるんだよ」とも言われました。しかし、上記の理由をはっきりと説明したところ、そういうはっきりとした意見を持って

いるなら、僕たちも協力する、と言って頂け、最終的には、指導教官は望みどおり Henning Gross-Ruse Khan になりました。

これにはクラスメートもかなり驚いたらしく、「Ryoko の指導教官は有名な先生になると思っていた」と皆に言われました。しかし、修士論文も大詰めになった頃には、皆に「Ryoko は賢い」と言われるようになりました。私の予想どおり、超有名な先生方が指導教官になった学生たちは、指導教官とのコミュニケーションがうまくいかず（全く取れない学生もいたようです）、かなり大変な思いをしたようです。そんな中で、私は、いつでも修士論文をアタマの隅に置いておけるように、毎月一回は進捗状況を確認するミーティングを設定して頂きました。「だって、Ryoko は Japanese だもん。」とよく言われたものです。日本人って詳細にはどう思われているんでしょうね。

3) 論文作成

さて、論文作成に当たっては、まず関係論文の収集から始まります。私たちは、Westlaw と LexisNexis を一年間使うことができましたので、検索ワードを色々変えて関係論文を集め印刷する、という作業が続きます。数人の学生が印刷を始めると、プリンターのオーバーワークが原因で何度もプリンターが故障しました。その後及び検索作業と並行して、集めた論文をひたすら読みこなす作業が続きます。人によって、論文を書き始める時期は違いますが、MIPLC より、4月と8月に進捗状況を確認するために書類提出が指定されており、概ねこの期日を目安に論文が少しずつ形になっていったのではないかと思います。

ちなみに、私のテーマは比較的新しいものであること、各国特許庁の特許政策が主軸の一つでしたので、Website からの情報や各国特許庁の動向を知ることも重要でした。そこで、各国特許庁の Website からの情報に加え、担当者あてにメールを送る必要も生じました。欧日米韓英中全ての特許庁に連絡をしましたが、レスポンスが早かったのは英日欧、より詳細かつ有用な情報を頂けたのは欧英韓だったかと思えます。なお、以前にご紹介したワシントン DC Trip で訪れた USPTO（米国特許商標庁）では、審査官による講義の一部に「環境技術政策に関する USPTO の取り組み」という項目があり、このプレゼンがとても役に立ちましたが、USPTO への問い合わせに対する回答は残念ながら頂けませんでした。

4) ラストスパートそして製本

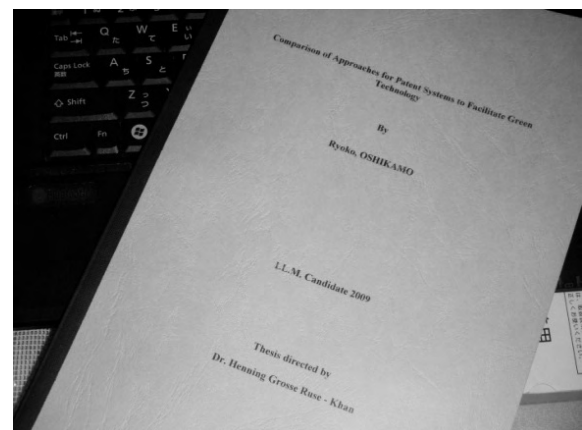
MIPLC は、7 月末で全ての講義と試験が終わりです。その後、9 月中旬の論文提出期限までの一カ月半、生活の全ては修士論文一色に染まったといっても過言ではありません。それまでの期間に作っておいた大筋の流れについて、足りない部分を足し、バランスを見極め、きれいに仕上げるという作業です。この「足りない部分」については、論文の全体像が見えてきた頃に、くっきり浮かび上がってくるのです。その隙間を埋めるために根拠となる論文を探し、全体のバランスを加味しながら、適宜挿入するという作業が続きました。夜中に論文を探し、昼間に MIPLC で論文を印刷して、アパートメントに戻って加筆をして、さらにまた夜になると…という生活サイクルが出来上がってしまったほどです。また、色んなことを考えているうちに、最初に何をしたかったのか、見失ってしまうこともありましたが、また、指導教官とのディスカッションでは、客観的かつ辛辣な意見に再起不能になりそうになったこともありましたが。最初に「厳しく指導して下さい」とお願いしたことを後悔したほどです。

修士論文の作成については、かなり厳しい書誌的事項に悩まされました。単語数、枚数、1 頁あたりの行数等とても厳しい基準があり、論文専用のファイルをダウンロードする段階では、ダウンロードできる学生とできない学生がおり、最終段階まで（9 月に入ってもまだ）かなり混乱していました。プログラムダイレクターが「私は知らない」と匙を投げたため、クラスメートでパソコンに通じていると思われる人に皆の期待が集まりましたが、彼が MAC 愛用者だったため、混乱に拍車がかかりました。さらに、私は最後の詰めで持論を展開し終わった時点で単語数を大幅に上回ってしまい、泣く泣く記載を削りました。書く作業よりも、削り取る作業の方が困難を極め、身が削られる思いです。削ろうか悩む記載については、客観的に見た場合、この記載が重要だったりしたら眼もあてられない、との思いもよぎりました。しかし、それも自分の実力の内、と割り切りました。同じ時期に並行してパテント誌向けの原稿も執筆していましたが、何枚書いても文句一つ言わずに全文掲載して下さるパテント誌には頭が下がる思いでした。また、最後の仕上げの部分では、引用文献記載を規則通り正確に記載するように体裁を整える必要がありました。引用文献の記載ルールは非常に細かく複雑で Bluebook という専門書

を図書館で借りてきて、最後、数日がかりで引用文献のチェックをすることになりました。論文メ切りの週の月曜日には執筆を完成させて、その後、余裕をもって製本を済ませて水曜日には提出とと思っていましたが、全てのチェックが終わったのが水曜日午前中、水曜日中に必要部数のコピーを取り、次の日に準備ができたクラスメートと製本に行く約束をしました。なお、私たちの学年の表紙の色はライトグリーンと指定されていましたが、廻った全ての製本屋さんで品切れと言われてしまい、「まさかこれではねられることはないだろう」と（しかし、一抹の不安を抱えつつ）、一番近いモスグリーンでの製本をお願いすることになりました。

製本についても、真偽の程がよく分からない情報が飛び交いました。一人で行ってもよかったのですが、記載が上がってしまい気分もかなりリラックスしていたこと、それから久々にクラスメートとお喋りするのにも楽しみだったこともあり、5 人ほどで待ち合わせをして、ルードヴィヒマクシミリアン大学（ミュンヘン大学；LMU）付近の大学街の中にある、MIPLC 指定の製本屋さんに行き、製本をお願いしました。製本表紙の出来上がったときの感動は言葉では言い尽くせないものがあり、全員の製本が出来上がったときは、思わず誰も口をきけなかったほどです。帰り道の皆の表情の明るいことと云ったら。「この人、本当はこんなに明るい人だったんだ」、と思える人もいたほどです。

とにかく、修士論文の提出期限一日前に私たち数名のクラスメートは無事に修士論文を提出することができました。私たちの 1 年前の学年（MIPLC 2009）の学生のうち何人かは、修士論文の提出が間に合わなかったり、規則違反のため受理されず、卒業式には来なかったものの、壇上に上がれないという出来事がありまし



（できたてのほやほやの修士論文）

た。私たち MIPLC 2010 の学生も MIPLC 2009 の卒業式に参列させて頂けたのですが、この淋しい光景を間の当たりにしたショックがよほど大きかったのか(少なくとも私にはとてもショッキングでした)、私たち MIPLC 2010 は学生全員が提出期限に間に合い、また書類上の不備もなく、全員が修士論文の単位を取得できたそうです。

5) 修士論文全般について

修士論文に取り組んだ中で一番の成果は、英語でディスカッションができるようになったことです。もともと日本にいたときから自己主張は強くなく、職場の月例会議等でも意見を言うという習慣がなかったため、自分が考えていることを、英語に乗せるだけの論理力でもって発言するという作業は、ミーティングの最初の頃は非常に困難に感じました。修士論文作成後期には、指導教官とのディスカッションにおいて、教官を納得させるためには、自分が書いた内容やその根拠を正確に伝えなければならないという必要に迫られました。例えば、特許業界で使われている特別な用語はアカデミアの方々には奇異に感じるようで、「これは審査基準でも多用されている言い回しで、その根拠はどこどこにちゃんと書いてあるし、拒絶理由でも雛型のように使われている」というように法文集持参で細かく説明しなければ前に進みません。さらに、後半になると、自分が記載した内容をその背景から順序立てて説明することも多くなりました。上記のように、私はかなりの分量の記載を削除したため、本当は書いてあった記載をこういう理由で削ったみたいなことも含めてディスカッションするようになりました。もし教官が重要と判断すれば、記載を元に戻すこともできると思ったからです。このように、自分の論文を書くという作業を通じて、「書いてあった／書いた内容をなぞるように喋る」という作業を介して、「ディスカッションのようなもの」ができるようになっていきました。当時は自分を客観的に眺める余裕はなかったのですが、今になって思えば、やはり幸運にも、Face-to-Face でディスカッションできる環境を整えることができ、なおかつ非常に patient な指導教官を得ることができたことは大きかったと思います。一連の修士論文作成作業がなければ、今の私はあり得ないと思っています。

また、指導教官を通じてドイツでの勤労意識についても触れることができました。今では指導教官とはご

家族ぐるみでお付き合いをさせて頂き、奥さま主催のパーティーに呼んで頂けたりと、嬉しい限りなのですが、とにかく、ドイツ人は家族を大切にします。勤務時間も例えば、指導教官は夕方の5時には帰宅してしまい、いつも不在でしたが、それは家族と一緒に夕食を共にするためだとか、そして、家族が寝静まってから、仕事を再開するとのことで、私に届くメールも深夜のものが多く、驚きました。また、休暇も、一度に3週間程取得するのが当たり前のようです。これも家族のためだとか。教官の名誉のために断っておきますが、これは何も私の指導教官に限ったことではなく、ドイツでは当たり前のようで「ドイツ人はよく働きよく楽しむ」と言われるゆえんのようで、ドイツ人はそのようなメリハリの利いた勤務形態を誇りに思っているようです。私も日本のことをよく聞かれましたが、逆にドイツ人からすると日本人の勤労意識は理解できない部分もあるようでした。以上、修士論文では、色々なことが学べ、MIPLC で一番有意義なプログラムだったと思っています。

2. ミュンヘン紹介：ミュンヘンにちなんだお城

ここミュンヘンはバイエルン自由州の首都、以前はバイエルン王国と呼ばれていたところです。由来は、10世紀に神聖ローマ帝国によりバイエルン大公国として設置されたことに遡ります。神聖ローマ帝国が崩壊した後は、ナポレオンボナパルトによって、バイエルン王国に昇格して以来、ドイツ革命で王政が廃止されるまでは、ヴィッテルスバッハ家一族によって治められてきた国です。このヴィッテルスバッハ家一族のうち、一番有名なのは、「メルヘン王」「狂王」とも呼ばれたルートヴィヒⅡ世ではないでしょうか？ 若いころは美男子としても名高かった彼は、リヒャルト・ワーグナーをこよなく愛したことで知られていますが、次第に政治から離れて文学や芸術の世界にのめり込み、最期はバイエルンのとある湖の湖畔で変死体となって発見されるという数奇な運命を遂げたことで悲劇の王という悲壮観も漂います。また、彼は国庫を破綻させる瀬戸際まで築城に熱意をかけたことでも有名で、豪華なお城を築いたことから、「(バイエルンの)メルヘン王」とも呼ばれています。今回は、このルートヴィヒⅡ世の足取りを、彼にまつわるお城や宮殿等をご紹介しますので辿ってみようと思います。

1) 生まれ = Nymphenberg 城 =



(ニンフェンベルグ城)

ミュンヘンの旧市街地から北西に位置する 20 ヘクタールの庭園も擁するこのお城は映画のロケ地として使われたこともあるそうです。ルードヴィヒ II 世は 1845 年 8 月 25 日にこのお城で生まれたということです。



(お城の背後に広がる大庭園への小路)

イタリア人設計士の手によるバロック様式のこのお城は、王家一家の夏の避暑地として使われていたそうです。石のホールと呼ばれる祝宴広間は建物の中央 3 階分をぶち抜いて作られており、天井のヨハン・バプティスト・ツインマーマンの手になるフレスコ画とフランソワ・ド・キューヴィエエ作の装飾が見どころのひとつかと思えます。

なお、宮殿内部のダイニングルームには美人画ギャラリーという壁にこれでもかというくらいの多数の美女たちの肖像画（世の中の美女と呼ばれる女性たちがカテゴライズされているかのような研究成果の様相を呈しています）が展示されており、これは圧巻です。これは、ルードヴィヒ II 世の祖父にあたる、ルードヴィヒ I 世が収集したコレクションなのだそうですが、私が訪れたときは、後ろの方で、外国人が「王様



(ニンフェンベルグ城祝宴広間の天井フレスコ画)

だから許されるんだよね、俺がやったら…」「あんたのコレクションなんて品がなくて誰も見やしないわよ」みたいな夫婦漫才を練り広げていて、ガイドを聴くより面白かったです。

2) 少年時代 = ホーエンシュヴァンガウ城 (Schloss Hochenschwangau) =



(ホーエンシュヴァンガウ城)

ルードヴィヒ II 世が少年時代を過ごしたお城で、彼が後に築城したノイシュバインシュタイン城と目と鼻の先、フュッセンという街の南に位置します。決して派手ではありませんが、メルヘンチックな黄色がのどかな田園風景に溶け込んでいます。

ルードヴィヒ II 世がメルヘン王と呼ばれるゆえんはこんなメルヘンチックなお城で幼少時代を過ごしたからかもしれません。なお、シュヴァンガウとは、「白鳥の河口」という意味で、このあたりの地名になります。ホーエンシュヴァンガウは、さしずめ、「かみシュヴァンガウ村」とでも言いましょうか。このお城は、ノイシュバインシュタイン城とセットで見学することがで



(お城からの遠景, バイエルンの村むら)



(レジデンツの外観)

きて、内部も見せてもらえます。

3) レジデンツ＝ミュンヘンでの居城＝

マックスプランク研究所のお隣にあり、中庭が私の通学路でもあったミュンヘン市内のレジデンツはヴィッテルスバッハ家の本宮殿にあたります。ルートヴィヒ二世も即位直後、まだ世を憐む前はこの場所で政治を司っていたようです。彼がここレジデンツで生涯たった一度ですが、ビスマルクと会見したというのも有名な話だそうです。なお、このレジデンツ、最初の宮殿は、レジデンツの敷地内にあるアルター・ホフ(旧王宮)というところにあったそうです。しかし、13世紀に多発した市民の反乱から王家が身を守るため、1385年に新しい宮殿を建設することになり、その後も増改築を繰り返し、19世紀のルートヴィヒ一世の時代に現存する宮殿の形に落ち着いたそうです。何しろ、400年以上年月をかけて増改築を繰り返したため、建築様式は、ルネサンス-ロココ調-バロック-新古典主義の建物が併存しています。なお、アルター・ホフは現在、お洒落なレストランになっています。

ヴィッテルスバッハ家は、代々の当主は芸術に理解があり、レジデンツの内装も客人が息をのむほどの豪華絢爛さで洗練されています。その一方で外観がシン



(アルター・ホフ)

プルなのもまたドイツ人の気質かなとも思いました。なお、写真では外壁に装飾が施されているように見えますが、これは平坦な壁にたくさんの線が書き込まれており、だまし絵のように立体感があるように施されています。当時の流行りだったようです。

1918年にバイエルンは王政が崩壊して最後の王ルートヴィヒ三世が退位しましたが、このレジデンツはその2年後に一般公開されました。第二次世界大戦で大きな被害を受けたものの、40年の年月をかけて入念な修復工事を行ない、ほぼ元の姿を取り戻しています。



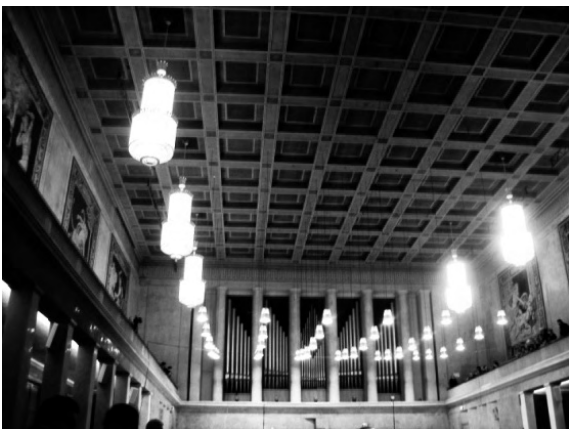
(レジデンツの中庭の噴水)

現在、レジデンツ内部は「レジデンツ博物館」と「レジデンツ宝物館」として公開されています。「レジデンツ博物館」は王宮の内部の広間や数々の部屋がそのまま見られるもので、ハイライトは「アンティークヴァリウム」や「祖先画ギャラリー」「銀の間」など。「レジデンツ宝物館」は、ヴィッテルスバッハ家に伝わる豪華な宝物が展示されています。



(レジデンツ宝物館の展示物の一部)

そのほか、レジデンツにはクヴィリエ劇場（旧王宮劇場）やレジデンツ庭園などもありますし、現在では、いくつかの建物はコンサートホールになっており、欧



(パテントオケ演奏会場のヘラクレスホール)

州特許庁オーケストラ（パテントオケ）の演奏会もその中の一つで開かれていましたし、日本でも大人気のピアニストのフジコ・ヘミングさんのサロンコンサートも客間風のお部屋で催されていました。



(レジデンツの南向かいのオペラ座とフランツヨーゼフ公の像)



(オペラ座内部の様子)



(レジデンツの北西向かいのオデオン廟)

4) 築城その1:ノイシュバインシュタイン城 (Schloss Neuschwanstein)



(ノイシュバインシュタイン城外観)

ノイシュヴァンシュタイン城はおそらくドイツで一番有名な観光名所ではないでしょうか。このお城は、アメリカ、パリ、香港にあるディズニーランドの「シンデレラ城」のモデルのとしても知られていますね。



(山の上のメルヘン城)

このお城の名前のうち、「ノイ (Neu)」とはドイツ語で「新しい」という意味で、以前はこのお城の近くにシュヴァンシュタイン城というお城があったことから、「新シュヴァンシュタイン城」という感じで命名されたようです。また、先ほどご紹介したホーエンシュヴァンガウ城の近くにあるために、「ノイホーエンシュヴァンガウ城」と呼ばれていたこともあったそうです。

ルートヴィヒ二世はワーグナーのパトロンであったことでも有名で、このお城には彼の作品にちなんだお部屋、調度品などで溢れています。また、彼は中世の騎士道にも憧れの念を抱いており、その憧れをロマンティックな城を介して体現しようとしたようです。そのため、お城の設計は宮廷歌劇場の舞台装置などを担当した画家が担当したそうで、当時の基準からすれ



(お城の入り口、外観とまた少し雰囲気異なります)

ば、おおよそ実用には不向きなお城だったそうです (1869 - 1886)。

なお、当時のワーグナーは素行が悪く、評判が悪かったそうです。そのため、ルートヴィヒ二世は家臣の反対を受け入れざるを得ず、不本意ながらワーグナーを一時追放したそうです。それ以来、彼は政治に無関心になり、築城に情熱を注いだようです。そして、ルートヴィヒ二世はこのお城が未完成ながらも居住できる程度になった時点で、首都ミュンヘンからこの城に居住したのですが、その期間はたった102日間。ルートヴィヒ二世が謎の死を遂げた時点で建築工事は中止され、その直後からこのお城は一般公開されるようになったということです。

5) 築城その2:リンダーホフ城 (Schloss Linderhof)

リンダーホフ城は、ルートヴィヒ二世が建設した3つの城のうち、完成までこぎつけた唯一のお城で (1874 - 1878)、バイエルン州南西のオーバーアマガウ (以前、キリスト受難劇でご紹介した可愛らしい村です) の近くに位置するお城です。



(庭園内の金色の女神像)

まず、お城の正面の庭園にある金色の女神像の噴水が目を引きます。さらに、建物内部はロココ様式の豪

華な装飾が施されています。リンダーホフ城は、ルートヴィヒ二世がヴェルサイユ宮殿内のトリアノン宮殿から発想を得て（模倣ではありません）、バロック様式の雰囲気も持ち合わせたルネサンス様式のお城で、彼の「作品」と言われています。



(リンダーホフ城)

城館内にはルイ14世、ルイ15世、ポンパドゥール夫人やマリー・アントワネット等のフランスブルボン王朝にまつわる人々の像が置かれています。これは、彼がフランス王朝に傾聴しており、こういった人々に挨拶したり話かけたりするために置かれていたということです。そして、彼は人嫌いでもあったため、食事などの用意で召使いが彼と顔を合わせることがないように、自動でテーブルを持ち上げるシステムなどが作られていたそうです。



(ヘレンキムゼー城のものですが、食事の支度ができたテーブルの移動システムです)

6) 築城その3:ヘレンキムゼー城 (Schloss Herrenchiemsee)



(ヘレンキムゼー城の Neues Palais)

ヘレンキムゼー城は、ドイツ、バイエルン州南東の国境に近く、オーストリアのザルツブルグにも程近いキム湖（キムゼー）の中央に浮かぶヘレン島にあります。ルートヴィヒ二世が湖上の島を買取り、そこに大小さまざまな建物を建てたものです（1878 - 1886）。中でも、ヴェルサイユ宮殿を模した Neues Palais（新しい宮殿）が、もっとも有名で、彼が築城した3つのお城の中で一番大きいお城でもあります。彼はルイ14世を敬愛していたこともあり、このお城は彼のルイ14世へのオマージュという位置づけでもあります。このことは、この Neues Palais の中の「鏡の回廊」というお部屋の天井に、25個のルイ14世の壁画を配したことで伺い知ることができます。



(Neues Palais の玄関にて)

さて、Neues Palais は、そのコンセプトから、ヴェルサイユ宮殿を完璧に模倣したものでなければなりませんでしたが、しかし、実際は、1886年にルートヴィヒ二世が死ぬと、建設が中断され、結局、70部屋になる予定だった宮殿のうち、50部屋は今でも未完成という

ことです。この未完成のお部屋も見学することができます。ところで、ヘレンキムゼー城はヴェルサイユ宮殿が建築されてからおよそ2世紀後に建築が開始されたこともあり、ヴェルサイユ宮殿よりも勝っているところがいくつかあるということ、ガイドさんから教えて貰いました。例えば、1)「鏡の回廊」はヴェルサイユ宮殿のものより8m長い；2) ヴェルサイユ宮殿にはなかったトイレが導入された；3) 食堂にそれは見事なマイセン焼きの陶磁器のシャンデリアがある（これは私のヒアリング力によれば世界一大きいシャンデリアだということです）。そして、お城の前に広がる庭園には左右対称に噴水が配されているのですが、これはルートヴィヒ二世のロマン主義的嗜好による、素晴らしいものです。



(庭園の噴水)

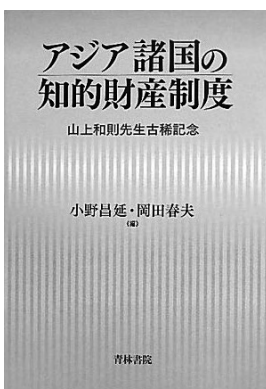
7) 眠る＝セントミヒヤエル教会＝

ルートヴィヒ二世は、これらのお城の他にも、ノイシュヴァンシュタインよりも高い岩山の上により豪華なファルケンシュタイン城の建設計画をたてていた他、オリエント風のお城の建設構想もあったようです。ところで、これら一連のお城の建設費用は、プロイセン王国がドイツ統一を果たした際に、バイエルン王国が彼らによる統一を認めたことに感謝して、ルートヴィヒ二世を尊敬していたビスマルクから送られた資金が中心だったそうです。足りない分は王室関係の費用から捻出されたもので、バイエルン政府の国庫とは無関係であったものの、王室公債を発行して王室の借金はかさんでいったそうです。なお、当時のバイエルン政府は、プロイセン王国に対して戦争賠償金の支払いをしなければならぬという状況にあり、これ以上の借金は無用とのことで、政府首脳がルートヴィヒ二世を精神病と判定し禁治産者としてベルク城というお城に軟禁したそうです。そして、その翌日、ルートヴィヒ二世は主治医とシュタルンベルク湖畔で変死体で見つかりました。このように、ルートヴィヒ二世は悲劇の王として、40歳という若さでその一生を閉じました。ちなみに彼は一生独身を通したということです。彼の遺体はミュンヘンの市庁舎マリエンプラッツのすぐ近くのセントミヒヤエル教会という教会に安置されています。

以上

(原稿受領 2011. 6. 7)

書籍紹介



単行本：700 ページ
 出版社：青林書院 (2010/09)
 ISBN-10：4417015198
 商品の寸法：22×16.4×4.5cm

本書は、アジア諸国の知的財産法制度及びその運用状況等に関する概説書である。大きく分けて以下の三編からなる。

第1編「総論」では、アジア知財法制度の変遷及び今後の展望が述べられている。執筆者自らが提唱する開発法学の視点に立つての解説であり、切り口が面白く、これだけでも読み応えがある。

第2編「各国各論」では、アジア諸国の知財法制度が詳説されている。各国とも「国の一般概要」、「司法制度」、「知的財産関連法制」及び「エンフォースメント」に分説され、各国法制度を横断的に比較することが可能である。中国、韓国等の主要国を始め、カンボジア、モンゴルまでをも網羅する広範な解説は、本書の最大の特色であり、他に類を見ないところである。

第3編では、アジア諸国における知財保護の内容が簡単な「各国対照表」にまとめられている。実務者にとって重要な項目が的確に抽出されており、決して付録の枠に収まらない貴重な情報源である。

新興アジア諸国における知財保護対策が益々重要となりつつある今日、座右の一書としては是非とも備えておきたい一冊である。

(会誌編集部)